

# 高校野球における全国大会と地方大会 の試合内容の比較検討

## —昭和59年度・全国大会と秋田大会の比較—

大 藪 由 夫      小 野      巧

Comparison of National and Local Tournaments in  
High School Baseball

Yoshio Ohyabu and Takumi Ono

### I. はじめに

近年、高校野球は大変盛んであり、特に、全国大会においてはその1回戦より、テレビ、ラジオ、新聞等で全試合経過が報道されるに至っている。そこで、本研究では全国高等学校野球選手権大会（以後は全国大会と称す。）と同選手権地方大会（今回は秋田大会を対象とした。）においてその試合内容を試合時間、得点能力、守備位置と打順の関係等を項目別に比較して両大会の傾向を明らかにしようとするものである。そして、今後の練習、試合の参考資料として役立てたいと考える。

### II. 研究方法

分析した資料は、昭和59年度全国大会及び秋田大会を報道した朝日新聞、秋田魁新聞、そしてベースボール・マガジンの特集号を主として用い、各項目ごとに集計、整理した。更にチームを勝者と敗者に分けて両大会を比較した。また試合時間に関する項目で秋田大会Cとあるのは、秋田大会の全試合からコールドゲームを除いた試合を示す。

### III. 結果及び考察

#### 1. 試合時間（参照：表 1 a, b）

平均試合時間は、全国大会 2 時間 4 分、秋田大会 2 時間 15 分、秋田大会 C 2 時間 22 分と全国大会が最も短く、秋田大会や秋田大会 C との間には、それぞれ 11 分、18 分の

差があった。また、両大会の時間的ばらつき（標準偏差）は、 $\pm 15$ 分（全国大会）、 $\pm 25$ 分（秋田大会）、 $\pm 22$ 分（秋田大会C）であり、全国大会の幅が約30分であるのに対し秋田大会では約50分とばらつきが大きかった。

表1 bより、2時間以内に終了した試合数を比較すれば、全国大会24試合（50.0%）、秋田大会12試合（25.0%）、秋田大会C 4試合（12.1%）となり、全国大会と秋田大会の間には著差がみられ、特に、全国大会では2試合に1試合の割合で2時間以内に試合が終了していることになる。また、2時間30分を越える試合は、全国大会3試合（6.3%）、秋田大会14試合（29.2%）、秋田大会C12試合（36.4%）であり、全国大会に対して秋田大会の方が非常に多い傾向にある。

試合時間は短かければ良いとは一概に言えないが、全国大会の試合時間を考慮すれば、秋田大会でも2時間以内に実力を十分発揮出来る試合運びを修得することが必要とされ、以前から指摘されているように、より一層のスピーディーな試合がなされるよう、増々の努力が大切であろう。

表 1 試 合 時 間

a. 平均時間（ $M \pm SD$ ）

項 目 \ 大会名	全 国 大 会	秋 田 大 会	秋 田 大 会 C
平 均 時 間	2 時間04分	2 時間15分	2 時間22分
標 準 偏 差（SD）	$\pm 15$ 分	$\pm 25$ 分	$\pm 22$ 分
試 合 数（N）	48	48	33

## b. 度数分布

時 間 \ 大会名	全 国 大 会	秋 田 大 会	秋 田 大 会 C
1 時間16分～1 時間30分	1	2	0
1 時間31分～1 時間45分	1	3	1
1 時間46分～2 時間00分	22	7	3
2 時間01分～2 時間15分	17	16	13
2 時間16分～2 時間30分	4	6	4
2 時間31分～2 時間45分	1	6	4
2 時間46分～3 時間00分	2	6	6
3 時間01分～3 時間15分	0	2	2
試 合 数	48	48	33

## 2. 点差別の試合数（参照：表2）

2点差以内で終了した試合を比較すれば、それぞれ、24試合（50.0%，全国大会）、16試合（33.3%，秋田大会）と全国大会が上回った。この2点差をワン・チャンスによる逆転可能な限界点と考えれば、全国大会では同点、逆転可能な緊迫した試合展開が2試合に1試合の割合で行なわれていることになり、秋田大会と比較して著差がみられた。このことは、全国大会では技術的にも体力的にもほぼ同レベルのチーム間の試合の多いことが予想され、指導面にも当然考慮されなければならない事項と考えられる。

また、7点差以上を大量点差として比較すれば、全国大会10試合（20.8%）、秋田大会15試合（31.3%）であった。同時に3～6点差の試合を合わせても、秋田大会では点差の大きい試合が多い傾向にあった。ただし、12～13点差の試合が全国大会にあって秋田大会にないことは、秋田大会ではコールド成立を採用しているためと考えられ、この規則がなければ全国大会以上に、点差の大きい試合の多いことが当然予想される。

表2 点差別の試合数

大会名 \ 点 差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	合 計
全 国 大 会	14	10	4	3	1	6	3	2	2	0	0	1	2	48
(%)	50%		29.2%				20.8%							100%
秋 田 大 会	10	6	5	5	1	6	5	3	3	4	0	0	0	48
(%)	33.3%		35.4%				31.3%							100%

%：全試合に対する割合

## 3. 勝得点打の回（参照：表3）

表3は、試合の勝利を決定する得点を挙げた回を比較したものである。試合全体を3区分（序盤、中盤、終盤）及び2区分（前半、後半）の2種類の方法で分け、全体に対する割合を示した。

3区分法で比較すれば、全国大会はそれぞれ、29.2%（序盤）、33.3%（中盤）、37.5%（終盤）と終盤が最も高く、秋田大会はそれぞれ、37.5%（序盤）、39.6%（中盤）、22.9%（終盤）と中盤が最も高かった。また、2区分法で比較すれば、全国大会は47.9%（前半）、52.1%（後半）と後半が高く、秋田大会は68.8%（前半）、31.2%（後半）と前半が高かった。

このように試合全体の流れをみると、全国大会は試合の勝敗が後半あるいは終盤に持ち込まれる傾向にあり、勝敗は最後までわからないという状況にあるように思われる。反面、秋田大会は前半（68.8％）に試合の勝敗が決定するようである。更に、秋田大会の1回戦（9試合）はその傾向を最もよく特徴づけていると思われる。

表 3 勝 得 点 打 の 回

大会名 \ 回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合 計
全 国 大 会	6	6	2	4	5	7	3	5	5	3	2	48
( 3 D % )	29.2%		33.3%			37.5%					100%	
( 2 D % )	47.9%					52.1%					100%	
秋 田 大 会	9	3	6	8	7	4	4	2	2	3	/	48
( 3 D % )	37.5%		39.6%			22.9%						100%
( 2 D % )	68.8%					31.2%						100%

D: Division で3区分（3 D）、2区分（2 D）を表す

#### 4. 勝者チームの攻防別（参照：表4、表5）

表4に示すように、全国大会ではその勝者チーム数は先攻側が後攻側よりも2試合多く、秋田大会では先攻側と後攻側が同数であった。また、先攻別でそれぞれの大会を比較すれば、秋田大会よりも全国大会が1試合多く、後攻別で比較すれば全国大会よりも秋田大会が1試合多く差はあまりなかった。このことは予想していたより、先攻、後攻の影響による差が認められず全体的に後攻側が有利という従来からの考え方は両大会共に当てはまらなかった。

勝者チームを点差別にみると、1点差で勝った試合は、両大会共に後攻側が4試合多く、2点差で勝った試合は、先攻側が4試合多かった。以前より言われているよう

表 4 攻防別にみた勝者チームの試合数

攻 防 \ 大会名	全 国 大 会	秋 田 大 会
先 攻	25 (52.1%)	24 (50.0%)
後 攻	23 (47.9%)	24 (50.0%)
合 計	48	48

表 5 点差及び攻防別にみた勝者チーム数

全 国 大 会	先 攻 チーム数	5	7	2	2	0	4	2	1	1	/	/	0	1
	後 攻 チーム数	9	3	2	1	1	2	1	1	1	/	/	1	1
点 差		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
秋 田 大 会	先 攻 チーム数	3	5	2	2	1	4	2	3	1	1	/	/	/
	後 攻 チーム数	7	1	3	3	0	2	3	0	2	3	/	/	/

に、1点差試合では後攻側が有利という傾向にあるが2点差以上ではその傾向はないように思われる。更に、3点差以上の開いた試合で比較すれば勝者チーム数は全国大会では先攻側、秋田大会では後攻側が多い傾向にあった。

#### 5. 回別得点（参照：表6，表7，表8）

表6，表8は、回別の総得点及び平均得点を示したものである。なお、回の平均得点は、総得点を加えた回数で除したものである。また、総得点の順位は9回までのものを対象に記載した。

##### (1) 勝者チームの比較

1回の平均得点は、それぞれ0.69点（全国大会）、0.81点（秋田大会）と秋田大会が若干上回った。すなわち、回別得点で平均1点を越える回は全国大会では延長回を除くとみられず、0.88点（8回）が最高得点であった。しかし、秋田大会では1.08点（4回）、1.03点（8回）、0.98点（3回）と高い得点を示す回が多くみられたことによるものである。

また、9回内での平均得点の上位3位（○印）を比較すると、全国大会ではそれぞれ8回（1位）、5回（2位）、6・2回（3位）であり、秋田大会ではそれぞれ4回（1位）、8回（2位）、3回（3位）であった。すなわち、全国大会では中盤から終盤に高い得点を示し、秋田大会では特に中盤前後に高い得点がみられた。更に、両大会共に8回は高い得点を示した。これらのことは全国大会において勝者となるためには後半に強くなければならないことを示唆しているものと思われる。

表 6 勝者チームの回別得点

全 国 大 会	項目 \ 回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合 計
	総 得 点	28	36	28	15	41	36	35	42	20	6	3	290
	平 均	0.58	0.75	0.58	0.31	0.85	0.75	0.73	0.88	0.71	1.20	1.50	0.69
	順 位	7	③	7	9	②	③	5	①	6	/	/	/
	加えた回数	48	48	48	48	48	48	48	48	28	5	2	419

秋 田 大 会	項目 \ 回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合 計
	総 得 点	38	17	47	52	41	32	30	37	16	3	313
	平 均	0.79	0.35	0.98	1.08	0.87	0.71	0.73	1.03	0.76	1.00	0.81
	順 位	5	9	③	①	4	8	7	②	6	/	/
	加えた回数	48	48	48	48	47	45	41	36	21	3	385

順位は1回～9回の範囲内で決定した。また○印は1～3位までを表す。

## (2) 敗者チームの比較

1回の平均得点で比較すれば、それぞれ0.23点（全国大会）、0.22点（秋田大会）と全国大会が幾分上回っているものの、ほとんど差はないように思われる。

両大会において、9回内の上位3位（○印）で比較すると、全国大会ではそれぞれ1回（1位）、9回（2位）、4・5回（3位）であり、秋田大会ではそれぞれ4回

表 7 敗者チームの回別得点

全 国 大 会	項目 \ 回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合 計
	総 得 点	15	8	10	12	12	10	11	7	13	0	1	99
	平 均	0.31	0.17	0.21	0.25	0.25	0.21	0.23	0.15	0.27	0	1.00	0.23
	順 位	①	8	6	③	③	6	5	9	②	/	/	/
	加えた回数	48	48	48	48	48	48	48	48	48	5	1	438

秋 田 大 会	項目 \ 回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合 計
	総 得 点	12	12	6	14	7	12	8	9	9	0	89
	平 均	0.25	0.25	0.13	0.29	0.15	0.27	0.18	0.24	0.27	0	0.22
	順 位	4	4	9	①	8	③	7	6	②	/	/
	加えた回数	48	48	48	48	48	45	44	37	33	3	402

順位は1回～9回の範囲内で決定した。また○印は1～3位までを表す。

高校野球における全国大会と地方大会の試合内容の比較検討

(1位), 9回(2位), 6回(3位)であった。すなわち, 全国大会では序盤, 中盤, 終盤と敗者チームにおいてもバランス良く得点しているが, 秋田大会では中盤, 終盤は同傾向を示すが, 序盤に劣る傾向を示した。

(3) 大会別の比較

勝者チームと敗者チームの得点差を大会別に比較すれば, それぞれ0.46点(全国大会), 0.59点(秋田大会)と当然勝者チームが上回り, また, その差は秋田大会の方が大きかった。また, 回別に検討すると, 全国大会では勝者チームは8回に最高得点(1位)を挙げているが敗者チームは同回に最低得点(9位)を示した。また, 勝者チームでは1回が最高得点(1位)を示しているのに対して勝者チームは7位と低いのが特徴と思われる。

秋田大会では, 両者チーム共に4回が最高得点で同傾向を示した。しかし, 2位の得点は勝者チームでは8回に, 敗者チームは9回にみられた。

以上のことより, 全国大会では後半に追い上げ可能なチームが勝者となり, 秋田大会では前半に突き放せるチームが勝者となる傾向にあるものと思われる。

表 8 回 別 得 点 の 順 位

チ ャ ム 名	大会名 \ 順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
勝者チーム	全 国 大 会	8	5	6, 2	7	9	3, 1	4		
	秋 田 大 会	4	8	3	5	1	9	7	6	2
敗者チーム	全 国 大 会	1	9	4, 5	7	6, 3	2	8		
	秋 田 大 会	4	9	6	2, 1	8	7	5	3	

6. 守備位置と打順の関係(参照:表9)

表9は, 両大会において各守備位置の選手が何番を打っているか, 守備位置と打順の関係を示したものである。また, 打順はすべて先発時を使った。なお, 上段は全国大会, 下段は秋田大会を表わしている。さらに比較の焦点は, 1~3位までとクリーンナップ打者(○印)に限定した。

投手: 全国大会では8番, 9番打者が全体の約半分(44.8%)を占め, 次にクリーンナップが続いている。秋田大会では4番と8番打者が同率(20.8%)で1位であった。全体的には全国大会が, 打撃よりも投球重視の傾向にあると思われる。

捕手: 両大会共に4番打者が1位を占めており, その傾向も全国大会(30.2%)が

大 藪 由 夫・小 野 巧

表 9 守備位置と打順の関係

強 ← (傾 向) → 弱

順位 位置	1	2	3	4	5	6	7	8	9	(例)
投手	8 (24.0)	9 (20.8)	④ (12.5)	③ (11.5)	⑤ (11.5)	7 (10.4)	6 (9.4)	1 (0)	2	守備位置 全国大会の打順 (全体に対する割合%) 秋田大会の打順 (全体に対する割合%)
	④ (20.8)	8 (20.8)	6 (14.6)	⑤ (12.5)	7 (10.4)	③ (8.3)	9 (7.3)	2 (4.2)	1 (1.0)	
捕手	④ (30.2)	8 (16.7)	7 (15.6)	⑤ (13.5)	6 (12.5)	③ (5.2)	9 (5.2)	2 (1.0)	1 (0)	クリーンナップ(3, 4, 5番打者)を○印で表す。
	④ (26.0)	8 (13.5)	6 (12.5)	③ (11.5)	⑤ (10.4)	7 (10.4)	1 (9.4)	2 (6.3)	9 (0)	
一塁手	④ (28.1)	⑤ (17.7)	③ (15.6)	7 (13.5)	2 (7.3)	6 (7.3)	8 (5.2)	9 (5.2)	1 (0)	
	⑤ (21.9)	6 (18.8)	7 (16.7)	④ (15.6)	③ (13.5)	1 (5.2)	2 (5.2)	8 (4.2)	9 (4.2)	
二塁手	2 (24.0)	9 (21.9)	8 (14.6)	1 (11.5)	6 (9.4)	③ (6.3)	7 (5.2)	⑤ (4.2)	④ (3.1)	
	9 (32.3)	8 (18.8)	2 (13.5)	③ (11.5)	1 (9.4)	6 (5.2)	7 (5.2)	⑤ (4.2)	④ (0)	
三塁手	6 (21.9)	⑤ (13.5)	9 (12.5)	1 (12.5)	2 (10.4)	7 (10.4)	③ (7.3)	④ (7.3)	8 (4.2)	
	2 (21.9)	1 (15.6)	9 (12.5)	③ (10.4)	⑤ (10.4)	8 (9.4)	6 (8.3)	7 (6.3)	④ (5.2)	
遊撃手	1 (28.1)	2 (22.9)	9 (15.6)	7 (8.3)	③ (7.3)	6 (6.3)	8 (6.3)	⑤ (3.1)	④ (2.1)	
	1 (26.0)	③ (22.9)	2 (16.7)	8 (13.5)	9 (8.3)	④ (4.2)	7 (4.2)	6 (3.1)	⑤ (1.0)	
左翼手	③ (20.8)	1 (17.7)	6 (14.6)	7 (14.6)	8 (8.3)	⑤ (7.3)	2 (6.3)	④ (6.3)	9 (4.2)	
	⑤ (22.9)	2 (15.6)	6 (12.5)	7 (11.5)	④ (9.4)	1 (8.3)	8 (7.3)	9 (7.3)	③ (5.2)	
中堅手	2 (19.8)	1 (17.7)	③ (14.6)	⑤ (13.5)	6 (10.4)	8 (10.4)	7 (9.4)	9 (3.1)	④ (1.0)	
	1 (21.9)	7 (17.7)	9 (16.7)	③ (12.5)	6 (12.5)	2 (8.3)	④ (7.3)	8 (5.2)	⑤ (3.1)	
右翼手	⑤ (15.6)	1 (12.5)	7 (12.5)	③ (11.5)	9 (11.5)	8 (10.4)	④ (9.4)	2 (8.3)	6 (8.3)	
	⑤ (18.8)	7 (17.7)	6 (12.5)	④ (11.5)	9 (11.5)	1 (8.3)	2 (8.3)	8 (7.3)	③ (4.2)	



上回っている。次に、6～8番打者が続くが「打撃のための捕手か守備のための捕手か」を極端に表わしていると思われる。

一塁手：全国大会では1～3位までをクリーンナップが占め、秋田大会よりも中心打者を占める傾向が顕著である。

二塁手：クリーンナップの傾向は非常に少なく、下位打者の場合が多い。その中でも2番打者が、それぞれ1位（全国大会）、3位（秋田大会）とその傾向を異にしている。更に、両大会共に4番及び5番打者は最も少ない。

三塁手：秋田大会では2番及び1番打者が上位であり、「チャンスメーカー」の傾向が全国大会より強いと思われる。

遊撃手：両大会共に1番打者が1位を占め、2位は2番打者（全国大会）、3番打者（秋田大会）である。

左翼手：1位は3番打者（全国大会）、5番打者（秋田大会）と左翼手が中心打者となる傾向を示している。両大会共に上位の順位では、同傾向にあると思われる。

中堅手：全国大会では2番、1番、3番、5番打者と続き、打順構成で重要な上位打線を占めており、秋田大会よりも打撃能力が上回っていると思われる。

右翼手：両大会共に5番打者が1位を占めており、3番及び4番打者の順位も両大で差はないと思われる。ただし、1番打者の占める割合が全国大会と秋田大会との間に若干の差があるように思われる。

## 7. 攻撃記録の比較（参照：表10）

表10より、各項目別に両大会を比較すれば、勝者チームで全国大会が上回っているのは、打数、安打、三振、犠打、併殺打であり、秋田大会では得点、打点、四球、盗塁、失策、残塁が上回った。また、敗者チームで全国大会が上回っているのは、打数、安打、打点、三振、併殺打であり秋田大会では四球、盗塁、失策、残塁が上回った。また、得点及び犠打は同数値を示した。

各項目の中で、安打においては全国大会が両者チーム共に秋田大会を上回った。全国大会では好投手が多く、その中で高数値をあげたことは、打撃力も相当高いと思われる。また、失策においては、秋田大会が両者チーム共に全国大会を上回った。やはり全国大会出場チームは守備力も高いことを示唆しており、その中でも勝者チームは一試合平均0.96と1個の記録も示さないことは大変すぐれていると解される。なお、犠打において敗者チームでは同数値を示したが、勝者チームでは全国大会が上回っており、前記の打撃力（安打）が高いのと同時に犠打も多く全国大会での攻撃力の重要

なポイントと思われる。

表 10 攻撃記録の比較（一試合平均）

全国大会	勝者チーム	6.04	33.25	10.50	5.48	4.04	3.63	2.88	1.65	0.96	1.13	7.33
	敗者チーム	2.04	31.81	6.96	1.83	6.21	2.23	1.33	0.92	1.42	0.60	5.85
<div> <div>得点</div> <div>打数</div> <div>安打</div> <div>打点</div> <div>三振</div> <div>四球</div> <div>犠打</div> <div>盗塁</div> <div>失策</div> <div>併打</div> <div>残塁</div> </div>												
秋田大会	勝者チーム	6.52	30.75	9.50	5.54	3.63	4.58	2.60	2.77	1.02	0.54	7.67
	敗者チーム	2.04	28.52	5.58	1.75	5.65	3.58	1.33	1.27	2.52	0.52	6.69

#### Ⅳ. おわりに

1) 秋田大会の試合時間が長く、その度数分布から全国大会との間に大変な差が見られた。いろいろな原因があろうが暑い試合時に集中したプレーを期待する上でもやはり、時間の短縮に心掛ける必要性は高いように思われる。

2) 点差別に試合を検討しても全国大会では2点差（少差）以内の試合が50%を占めた。同大会での2時間以内の試合が50%にあることも合わせ考えると、好投手と巧打者の中で切迫した試合展開を自覚して、戦術面と精神面に関して考慮された練習内容にしなければならないだろう。

(3) 「回別得点」と「試合の勝利を決定する回（勝得点打の回）」をみると、全国大会では中盤、終盤に得点が高く、勝敗の決定される傾向にあるように思われる。反面、秋田大会はそれよりも早い回に得点及び試合が決定される傾向にあるように思われた。

(4) 攻防別では1点差の試合においては予想どおり後攻側が結果的に勝者チームとなっているが、それ以外については「後攻有利」の傾向はなく、全国大会では先攻側、秋田大会では後攻側が若干勝者チームとなる傾向が高いようであった。

(5) 守備位置と打順の関係については、上位3位までの範囲でクリーンナップ打者を比較すれば、両大会に共通するのは投手、捕手、一塁手、左翼手、右翼手であった。他に、全国大会では三塁手、中堅手であり、秋田大会では遊撃手であった。特に、上位3位までクリーンナップ打者が全国大会では一塁手であった。更に、捕手で4番打者の傾向が両大会共にみられた。

(6) 攻撃記録の比較について、安打では好投手の多いにも拘らず全国大会の方が勝

者及び敗者の両者チーム共に秋田大会を上回った。また犠打では勝者チームに限定すると全国大会が秋田大会を上回った。更に、失策は両者チーム共に秋田大会が多かった。

**参考資料**

- 1) 朝日新聞（秋田版），1984年7月14日～22日号
- 2) 秋田魁新聞，1984年7月14日～22日号
- 3) 朝日新聞（全国版），1984年8月9日～22日号
- 4) 秋田魁新聞，1984年8月9日～22日号
- 5) 週刊ベースボール（増刊号）「全国高校野球特集号」，1984年9月8日発行

（おおやぶ よしを 本学助教授 保健体育）

（おの たくみ 秋田高等学校教諭 保健体育）